広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第51号　2002　257－264

現代青年の交友関係に関連する心理学的要因の展望

廣　實　優　子

(2002年9月30日受理)

The review of psychological factors related with adolescent friendship in contemporary

Yuko Hirozane

Adolescence has long been characterized as a time when individuals explore and discover psychological characteristics of the self, and establish close relationship with friends of the same or opposite sex. Today, however, many researchers revealed that contemporary adolescents in Japan tend to worry themselves hurt by others and to avoid a deep relationship with their friends. The purpose of this study was to consider some psychological factors that seemed to be related to these tends in adolescent friendship: self-acceptance, the sense of acceptance by significant others, mental health, and social skills. The relations between adolescent friendship and these factors have been discussed. It was concluded that accepting the self and being accepted by others are closely connected with favorable relations with adolescents' friends.

Key words: adolescent, friendship, self-acceptance, the sense of acceptance by others
キーワード：青年期，友人関係，自己受容性，他者からの受容感

近年，いじめや不登校等の教育的問題が憂慮されているが，これらの根本には友人関係に端を発しているものも少なくなく，青年にとって友人関係は重大な意味を持っていることが伺える。また，発達的見地からも，青年期の友人関係は大きな役割を果たすことが説明されてきた。

しかし，現代における青年期の友人関係は，これまで論述されてきたような様相とは異なってきており，その希薄化が指摘されている。こうした現象の背景には，様々な心理学的な要因の存在が推測できるが，本研究ではその中でも，自己受容性，他者からの受容感，精神的健康，及び社会的スキルを取り上げて，これらの関連性について考察することを目的とする。

1．青年期における友人関係

1.1. 青年期と友人関係の意義

青年期は，身体的成熟に伴い，自己意識が高まるとともに，他者への関心も増大し，心理的・社会的成熟に向けて変化していく時期とされている。すなわち，第二次性徴を境とした急激な身体発達が起こることにより，それまで青年が抱えていた自己像は大きく揺れ，青年は自分自身がどういう人物なのか，自分らしさとは何かを求め，新たな自己像を形成するに至る。このように親から精神的に自立し，自己形成を行うことが青年期における課題のひとつとされているが，同様に，同性，異性の友人との親密な関係を構築することもまた重要な課題とされている（Havighurst, 1953)。

青年期の交友関係は，活動や物品の共有などを中心とした関わりをする児童期と比較して，親密性，尊敬や共鳴に基づいた関わりへと変化する。青年は，知的・情緒的成熟に伴いお互いの違いを受容しつつ，相手との信頼・自己開示・相手への忠誠を基盤とした親密で有意義な関係性を維持し（Atwater, 1992)，そして，さらにはお互いに人格的な影響を及ぼし合うようになる（岩永，1991)。

こうした青年期の交友関係においては性差も指摘されている。男子は外的活動での達成を重視し，交際や共有活動などを通して親密さを感じる一方で（Leaper, 1994)，女子は友人に対して相互依存することを期待し

（和田，1993），お互いの気持ちを察し合い，他者や物事に対する感情を納得の行く形で共有する情緒的に結びついた関係（遠矢，1996）であると言われている。

また，同じ青年期でも，初期の頃には「広い範囲の友達と浅く関わるつき合い方」が多くみられるが，後期に近づくにつれて「狭い範囲の友達と深く関わるつき合い方」が多くなっていくことが示されている（落合・佐藤，1996）。限定された友達，すなわち親友と呼べる友人との相互作用の間で個人の柔軟性が増しながらも，友人への統制や同調的な態度は軽減する（Shulman, 1997）。青年は，親密な友人関係を展開する中で，自分の存在価値を再認識できる，心の支えとしての「自我支柱的意味」，自分と違った意見が聞けるなどの「価値・態度の教育的意味」，自分の悪い所に気づくといった「自己知覚促進的意味」を学んでいく（吉田・門脇・児島，1978）。総じて，友人は，自分を支えてくれ，自尊心を高揚させたり孤独感を癒してくれたりする精神面の安定をもたらす存在であり，行動の適切さなど社会的スキルの学習の場を提供し（松井，1990），自分の盲点に気づかせ自己理解を深めてくれる存在である（遠藤，1997）ということができる。

1.2. 現代青年の特徴

ところが，近年，青年にとって友人関係が有意義なものになっているかどうか，青年の成長や発達に友人関係がうまく機能しているかについて疑問視される声があがっている。新井（2001）は，今の子ども達は，親子関係の密着化やコンピューターアミューズメント・情報機器の発達などの生活環境の変化によって，友人が親密感を覚える対象となる時代ではなくなったとし，親に友達関係を干渉され自力で築き上げた友人関係を経験できない子どもは，親から受けた“いい子圧力”の影響により，友達との摩擦や衝突を避ける傾向にあり，また，自分のしたいことや考えていることを自己主張したり，どこで自己主張を抑え妥協したりしたらよいのかという人間関係の基本技能を学ぶ機会が奪われていると述べている。さらに，たとえ仲間と遊ぶことはできても，友達から否定的な行動やメッセージを受け取るようなことがあると，もはや友達ではいられなくなるようなケースが増え，不快な経験による情緒安定や許容心が身についておらず，ネガティブな感情を乗り越える耐性が乏しいと指摘する。

こうした現象が増える中で，現代青年の交友関係においても，これまで述べられてきたような友人関係とは異なり，その希薄化について，しばしば議論が持たれるようになった（例えば，松井，1990；岡田，1993a, b；上野・上瀬・松井・福富，1994）。そこでは，友人に同調的な態度をとりながらも，心理的には大きな距離を保つ表面的交友や自分が傷つくことを恐れた防衛的な態度による友人との深化回避が近年の特徴として論じられている。上野他（1994）は，友人への心理的距離を大きくとりつつも，同調的な態度を示す表面的交友を営む表面群の青年は，他者からの視線や評価を気にし，他者との調和を大切にして，行動的には優等生であるが，集団中心の生き方を望んでいるのでも，協同的であるのでもなく，心理的には友人と離れていて，ただ集団から外れまいとして群れているだけであり，必ずしも成熟した人間関係を築いているわけではないことを示唆している。さらに，小此木（1984）は，現代の青年は，表面上は調子いいが，人と深く関わることによって自分を失う不安が強いため，強い連帯感や友情を持つことができないと述べ，同様に，栗原（1985）も，自他を傷つけることやアイデンティティの問題を回避すること，友人を自分の内面に立ち入らせないようにすること，友人と群れていることで安心感に支えられていること等を挙げ，これらが青年のナルシシズム的で自己中心的な閉じられた優しさの表れであると指摘する。

これらからもわかるように，現代の青年期友人関係の多くの研究において関係の希薄化と深化回避が指摘されており，それらが青年に与える影響について検討が重ねられている。

2. 青年期友人関係に関連する諸要因の検討

2.1. 青年期の自己概念

(1) 青年期の自己と自己呈示

自己形成が青年期の主な課題であるのは前述した通りであるが，青年期になると人は自分の特徴をより抽象的に認識できるようになり，その自己概念はより複雑に組織化されたものとなる。そして，周囲や社会の目よりも自分の信念や基準から自分をみつめ，内在化された基準を確立していく（Harter, 1998）。このような過程において様々な自己像を持つようになった青年は，時と場合によって，自己呈示をするようになる（Hater & Monsour, 1992）。人はいつも自分のありたいままにいられるわけではなく，本当の自分とは違う態度を装うことがある。例えば，対人関係をスムーズにするために，相手が自分をどのように見ているかということを十分に意識して，自分が思っているまま，欲しているままではなく，相手に受け容れられるような，相手との関係を損なわないような自分を呈示せざ

るを得ない状況（梶田，1988）に遭遇したりするのも別段特殊なことではない。社会的モニタリングの知見からも，特別な状況において自分の行動や感情を様々表現することは柔軟性があるということでもあるため（Snyder, 1987; Graziano & Waschull, 1955），偽りの自己を呈示することが必ずしも悪いとは言えない。しかし，他者が自分を低く評価しないように，あるいは，他人に良い印象を与えようとするために自己呈示をすることは，ネガティブな影響をもたらすことが示唆されている。Hater, Marold, Whitesell, & Cobbs（1996）は，偽りの自己を演じている青年は，自分の価値が認められず，低い自尊心持つことを明らかにしている。人は偽りの自己を演じながらも，本当の自分とそうではない自分とを意識し，やがては矛盾した自己ではなく，より一致した自己を形成するようになる（Hater & Monsour, 1992）。内在化された基準に基づく自己決定をする青年がより安定し，統合された自己を形成するのに対して，偽りの自己呈示をする青年は，印象操作や外的な基準に依存した自己を形成する危険性があり，自己形成における否定的な影響が懸念されている。このような危険を阻害し，自分の真実の姿と思えるところと矛盾しない形で適切な自己呈示をするためには，まず自分の仮面性の実態についてありのままを認識することが必要であると言われている。この見地から，自己受容という概念が青年の発達に関与するものと考えられる。

(2) 自己受容性

従来，自己受容は人生を生きていく上で個人の自己実現のために必要な一要因として述べられてきた（伊藤，1989）。自己受容についての概念は，主に臨床的研究と実証的研究の2つの大きな流れを持っている。まず，ひとつは臨床的立場であるが，この立場における自己受容の定義は「ありのままの自己を受け容れること」（Rogers, 1944）とされ，基本的には自分自身を純粋に認めることを意味しており，評価的な側面は排除されている。これは，臨床的場面から得られた経験的知見に基づいたものであり，自己受容がひとつの具体的な状態像として表現されている。

他方，実証的研究の自己受容の捉え方は，「ありのままの自己を客観的に認知し，全体的に肯定する」ことであり，現実の自己を卑下したり歪めたりすることなく正しく認識し，肯定的に評価するという認知的・評価的側面が含まれる。すなわち，長所・短所を含めた自己の諸側面を冷静に認識し，ありのままの自分を嫌悪，否定せず承認し，自分の人間的価値を疑わず，自分の可能性や能力を信じることである。宮沢（1988）は，これに基づいて自己受容を自己理解，自己価値，自己承認，自己信頼の4側面から操作的に捉えている。他にも様々な見解があるが，宮沢の捉え方が内容的に妥当であると考え，本研究においてもこの捉え方で自己受容性を定義することとする。

これまで自己受容に関して，精神的健康や社会的適応性及び対人態度との関連から多くの臨床的，実証的研究が行われてきた。その結果，精神的健康については，低自己受容者は精神的健康の状態が良好でないこと（沢崎，1993），自己受容度の高い人は自らの力で自分の人生を切り開く意志が強く，精神的にも健康であることが明らかにされており（高井，2000），自己受容性は，心理的健康の指標のひとつとして見なされている。

また，対人態度や社会的適応性に関しては，自己受容的な人の特徴として，(a)他者に対して信頼・愛情をもった態度をとること，(b)他者と対立したり他者に同調・依存的になったりしないこと，(c)対人場面であまり孤独を感じないことが挙げられている（板津，1994）。対照的に，ありのままの自己を受容していない者は閉鎖性・防衛性が強く，特に女子に関しては他者からの評価を気にして行動する他者依拠性が強いことが示されている（高井，2000）。さらに，青年期及び成人期における対人関係は，他の年代に比較して自分が傷つくことを恐れる心性が強く，他者に対して閉鎖的になり，人から批判されたり自分が傷ついたりすることを回避するために自分の率直な意思表明をしないことが指摘されている。このような“閉鎖的・防衛的”な対人関係を維持する者は，自己の存在価値を見出せず，自分を肯定的に捉えられずに，自己を受容しがたい傾向にあると考えられる（高井，1999）。

以上のように，青年期の自己から捉えた対人態度の特徴は，前述した現代青年の友人関係に指摘される特徴といくつか符号する点があるように思われる。つまり，自己受容的な者が積極的で円滑な対人関係を構築するのに対して，自己受容的でない者が他者に閉鎖性・防衛性を強めることは，他者を自分の内面に立ち入らせないようにしたり，他者の評価を過敏に意識しながら偽りの自分を演出して，自分の本音とは裏腹な同調的態度をもって浅い関係を維持したりする青年の姿と合致する。こうしたことから，表面的な交友関係にとどまらず，友人とより満足する関係を構築することは，他者からの評価に対して過敏に依拠することなく，“ありのままの自己”を受容することと密接に関連があることが予想される。しかし，青年期の友人関係と，自己受容性との関連を直接検討した研究はほとんど見当たらない。わずかに吉岡（2001）が，中学生・高校生を対象として友人関係の満足感を友人関係の理想と

現実のズレ及び自己受容から捉えているのみである。その調査からは，友人関係の理想と現実のズレ，特に自己開示・信頼因子のズレが大きい者ほど満足感が低く，逆に，自己受容度が高い青年ほど友人関係に満足していることが見出されている。この結果に対して吉岡は，友人からの評価が気になり悩みや疲れを感じている現代の中学生・高校生は，自分の存在価値を感じられず，また他者への信頼感も十分に育っていないことから，友人への自己開示を望みつつもできない現実とのギャップが広がり，そして自分らしく振る舞えないことによって友人関係への満足度も低くなると推察している。ありのままの自分で自分らしく友人と接することは，円滑で満足度の高い友人関係を生み出す意味において重要であると言える。

2.2. 他者からの受容感

重要な他者に関しては，Cooley や Mead に代表される象徴的相互作用理論を始めとして古くから論述されている所である。これらは，社会的相互作用を通して自己概念を形成する際の重要な他者の影響に焦点が当てられたものであるが，その中でも特に，他人から自分を認めてもらう経験が，人として自分を承認できる足掛かりとなることから，重要な他者は自己や社会性の発達に重要な役割を果たすことが指摘されてきた。重要な他者の内容は，児童期では主に親であるとされ，親子関係や親の養育態度が子どもの自尊心や自己形成に与える影響を検証した研究は多い。親からの承認や受容は，感情的，道具的サポートよりも子どもの自尊心に強く影響し（Baumrind, 1989），また暖かく支援的な家庭に育った青年は社会的コンピテンスが高く，積極的な友人関係を築くことができることが示唆されている（Lieberman, 1999）。

そして，親と過ごす時間が少なくなる青年期になると，仲間や友人がより重要な位置を占めてくるようになり，友達からの承認，評価が青年の自己評価に反映されるようになってくる（Rosenberg, 1990）。勿論，これは青年期における親の重要性が減少したことを意味するものではなく，青年期において仲間はより重要になるものの，親の影響は依然として中心的であり続けると言われる（Burmester & Furman, 1987）。しかし，青年期に親友を持つというポジティブな経験が，親友からの配慮や思いやりによって自己承認の機会を与えられ，それ以前に家庭で経験したトラウマを克服できるほどに強力であると考えられているように（Rubin, Bukowski, & Parker, 1998），両親のみならず親しい友人から受けるサポートは，精神的な基盤として機能し，青年の高い自尊心を維持するのに有効である。平石（1993）も，青年が自分にとっての重要な他者を両親，友達，周囲の人であると認知していることを明らかにしており，これらすべてが青年の自己肯定性と自己安定性とに強く関連していることを見出している。この他者から受ける評価が否定的である場合，それが自己を脅かすために自己像が定着せず，安定しないものとなり，反対に，肯定的な評価を受けた場合，安定した自己像が得られるものと考えられている。

こうした見解と同様に，自己受容性と他者からの受容との関連についても，いくつか報告されている。Fey（1955）や大出・澤田（1988）は，自己受容的である者は他者から受容されていると高く感じていることを明らかにしており，他者からの受容を強く感じることによって，自己受容性が高まると考えられている。他人から受容される経験は自己受容性の高揚，ひいては良好な対人関係の構築や維持に必要な要因であると言える。

また，吉岡（2001）は，「他者へ貢献」している自分を受容することと友人関係への満足感との間に正の関連を見出している。自分が他の人に必要とされ，その人に貢献できていると感じている青年は，受容する“主体としての自己”と受容される“客体としての自己”の両方において受容度が高いことが推測できる。つまり，このような青年は，自分が友人の何らかの役に立っているという存在意義や有能感とともに，友人が自分を必要としてくれ，ありのままの自分が友人に受け容れられているという安心感を持ち合わせているものと思われる。自己受容的な青年が友人関係に対して高い満足感が得られるのは，自分が友人に対して貢献できると感じることだけでなく，友人から自分が受容されていると感じることもまた大きな要因なのではないだろうか。

2.3. 精神的健康への影響

友人関係は，青年の日常生活にも大きな影響を及ぼしている。古市・玉木（1994）は，中学生を対象として「級友適応」，「教師適応」，「学業適応」，「家族適応」の4側面から学校生活の楽しさをもたらす要因について検討をしている。その結果，学校生活の楽しさに強く影響しているのは「級友適応」であることが明らかにされている。この例のように，友人関係によって学校生活が充実したものになる一方で，逆にこれらが青年にとって強いストレッサーとなりうる可能性も十分にある。

岡安・嶋田・丹波・森・矢冨（1992）は，学校におけるストレスの原因を分析している。その結果，「学業」と「無力的認知・思考」との間に，そして「友人関係」

と「抑鬱・不安感情」との間に高い相関が得られており，友人とのケンカやトラブルなどが青年の不機嫌や怒り感情を引き起こしていることが示唆されている。

また，前出の上野他（1994）の研究においては，現代青年の特徴とされる「心理的距離」と「同調」の傾向が強い表面群において，次のような心理的な特性が明らかにされている。友人に同調しながらも心理的な距離は大きく保つこの群の男子は，劣等感が強く，退学や自殺などの問題行動念慮が強く，全般的に心理的な葛藤を有していることが示唆されている。

さらに，東京都都民生活局（1979）の調査では，高校生における交友関係の障害によって，高校生の精神的健康が損なわれていることが報告されている。学校において「よい友人がいない」とか「クラスのみんなが冷たい」と感じている高校生は，孤独感が強く，精神的に疲労した状態にあった。また，友人と心理的な距離は大きく保ちつつ，友人に気を遣う「クールな交友」をしている青年は，精神的に疲労した状態にあることも示されている（堀・松井，1981）。このように，友人関係が良好に営まれているかどうかが，青年の精神的健康に大きく関与しているものと考えられる。これらの研究では，表面的な交友関係のあり方が青年の精神的健康に直接的に関連していることまでは検討されていないが，現代青年が友人との適切な距離の取り方がわからずに，友人に気を遣いながらつき合いを続け，結果的にこれが精神的に強い疲労を感じさせていることが推察できる。浅い関わりをしていることと青年の心理状態が良好でないということとは無関連ではないようである。

2.4. 社会的スキル

教育現場において生徒指導上，最も深刻な問題のひとつに不登校がある。近年，その対策が進められながらも，その数は年々増加する一方であり，平成14年度では“不登校”を理由とする長期欠席者数が過去最高の13万9千人を記録した（不登校新聞，2002）。これは，特に状況が深刻な中学生では，36人にひとりが不登校児という割合である。また，文部科学省は同時に2001年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の中で「不登校状態となった直接のきっかけ」は，友人関係や学業を中心とした「学校生活に起因するもの」が36.2%，「本人の問題に起因するもの」35%，「家庭生活に起因するもの」19.1%であることを発表している。そして，「学校生活に起因するもの」の中でも友人関係をめぐる問題は最も多くなっていることが明らかにされており，その内容としては，「友人にいじめられる」，「仲間はずれにされる」，「仲間に加われず孤立する」，「心から話し合える友人がいない」，「部活動での人間関係がうまくいかない」などが挙げられている。このように，不登校の主なきっかけは，親密な友人関係を作れなかったり，仲間集団に入れなかったりする「友人関係のつまずき」であることが伺える。このような背後には，対人関係を円滑に営むための社会性の問題が潜んでいる。その社会性の問題について，社会的スキルの観点から考察する。

社会的スキルに関しては，「相互作用する人々の目的を実現するために効果のある社会的行動」と定義され（Argyle, 1981），Schneider et al.（1989）は人生に必要な社会性として，(1)他者の思考，感情，意図を理解する，(2)相互作用を行っているパートナーや環境についての情報を要約する，(3)会話や相互作用から得られる様々な意味を統合する，(4)相手と同様に自分の社会的行動を理解する，(5)適切な道徳判断をする，(6)積極的に利他的になる，(7)ポジティブな感情を適切に表現し，ネガティブな表現を抑制する，(8)相手を理解できるように言語的，非言語的コミュニケーションを図る，(9)他者からのコミュニケーションを上手に受け，パートナーの要求には快く応じることを指摘している。そして，社会的スキルに関する訓練は，これまでに社会不安や孤独感，対人関係上の問題，不適応の改善や複雑な人間関係の障害への予防という観点から多く試みられている。

Wollel & Danner（1989）は，一般的に対人関係上の問題を抱える人と社会的に適応している人では，①社会的スキルのレベル，②認知・原因帰属のプロセス，③仲間とのつき合い方に差異が見られるとしている。すなわち，対人関係に困難を示す人は，社会的スキルのレベルが低く，自分ひいては他者に否定的な反応を示していること，仲間（特に自分が親しいと感じている人）と過ごす時間や社会的活動が少ない上に，質的にも温かい相互作用が少ないことが明らかになっている。こうした指摘は，不登校児の対人関係上の問題や不適応の現象と一致するところが多い。

前川（1989）は，不登校をかかわり障害の側面から捉え，「子ども集団の中でどのように相手の要求を受け容れ，また自分を表現し，振る舞って良いかわからなくなってしまう子ども達がいる。（中略）こうした子ども達は一般的に内向的，非社交的，神経質な傾向を示し，対人関係に敏感であるとされている。不登校の子ども達は，こうした性格特性を背景として，友達や先生との関わりが重要となる学校場面での対人関係の問題をもちやすい子どもである。」と述べている。このような不登校児においては，対人困難性と適応不全が問題視され，友人との様々な場面を通して，関係性

を構築，維持するための社会的行動，いわゆる社会的スキルの不足が指摘されている。例えば，牧ら（1987）は，不登校群と一般群にわけて，幼少期の友達関係について不登校群は一般群よりも「遊び友達が少なかった」，「友達を避ける様子がみられた」，「近所の友達があまり遊びに来なかった」，「遊びの輪の中に入っていくのになじめず時間がかかった」などの経験が非常に多く，幼少期の友達関係の希薄さが示唆されている。

こうした事象をふまえて，現代の希薄した友人関係が生起する原因に社会的スキルを指摘している研究がある。橋本（2000）は，大学生の交友関係を「表層群」「無関心群」「積極群」「内向群」に分類して，交友関係の深化回避と社会的スキルとの間に負の相関を見出し，現代青年にスキルが欠如している可能性を示唆している。橋本は，対人関係を深化させないのは青年が主体的に望んでいるのではなく，社会的スキルが不足していることに由来しているのではないかと推測している。また，これら4群において社会的スキルを比較したところ，「表層群」と「内向群」において社会的スキルの低いことが明らかにされ，「表層群」は積極的に表面的な関係を志向しているわけではなく，「積極群」ほどのスキルを持っていないために表面的な関係を消極的に受容していると推察されている。希薄な友人関係が指摘されている今日，表面的な交友関係を維持する青年が，このような問題を改善・解消するためには，適切な社会的スキルの向上も考慮すべき問題であると言える。

3．まとめ

本研究では，現代青年の希薄化した友人関係に影響していると考えられる心理学的要因，すなわち，自己受容性，他者からの受容感，精神的健康，そして社会的スキルとの関連性を考察した。良好で円滑な友人関係を築くには，青年の適切な自己受容性と両親や友人から受容されることがまずは必要であると考えられ，そして，円滑な関係を維持するために必要なスキルを身につけ，これらが達成されることによって，結果的に安定した精神状態が青年にもたらされるものと思われる。しかし，成熟した親密性を達成するためには，まずは自我同一性が確立していることが前提条件になる一方で，他者との親密な関係によって自己を発見し，他者による受容によって自己受容が可能になるという逆の可能性も指摘されるように（南，1991），これらはどちらが先というよりも相互依存的に発達していくというのが妥当であろう（Damon, 1983）。青年が自分のありのままを見つめ，それを歪曲することなく受容し，またその自分を受容されることは良好な友人関係の構築・維持に寄与し，逆に良好な友人関係が他者からの受容を高め，適切な自己受容を可能にすると言える。

【引用文献】

Argyle, M. 1981 The nature of social skill. In M. Argyle (Ed.), *Social skills and health.* Methuen. pp.1-30.

Atwater, E. 1992 *Adolescence (3rd ed).* Prentice Hall: New Jersey.

新井邦二郎　2001　今，子どもにとって友達とは　児童心理　金子書房　**55**, 1-10.

Baumrind, D. 1989 Rearing competent children. In W. Damon (Ed.), *Child development today and tomorrow.* San Francisco: Jossey-Bass. pp.349-378.

Buhmester, D., & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, **58**, 1101-1113.

Damon, W. 1983 *Social and Personality Development.* New York: W. W. Norton & Company, Inc.（山本多喜司(編訳)　1990　社会性と人格の発達心理学　北大路書房）

遠藤公久　1997　交友関係　加藤隆勝・高木秀明(編)　青年心理学概論　誠信書房　pp.110-123.

Fey, W. F. 1955 Acceptance of others and its relationship to acceptance of self and others: A revaluation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **50**, 274-276.

古市裕一・玉木弘之　1994　学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究集録, **86**, 105-113.

不登校新聞　2002　不登校13万9000人に　文科省“早期発見，早期対応に「努力」”8月9日　全国不登校新聞社

Graziano, W. G., & Waschull, S. B. 1955 *Social Development: Review of personality and social psychology.* Vol.15. London: Sage. pp.233-260.

Harter, S. 1998 *The development of self-representations.* See Eisenberg. pp.553-618.

Harter, S., & Monsour, S. 1992 Development analysis of conflict caused by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental Psychology*, **28**(2), 251-260.

Harter, S., Marold, D. B., Whitesell, N. S. R., & Cobbs, G. 1996 A model of the effects of parent and peer support on adolescent false self behavior. *Child Development*, **67**, 360-340.

橋本　剛　2000　大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略との関連　教育心理学研究，**48**，94-102.

Havighurst, R. J. 1953 Human development and education. Longmans, Green & Co.（荘司雅子(訳) 1958　人間の発達課題と教育－幼年期から老年期まで－　牧書店）

平石賢二　1993　青年期における自己意識の発達に関する研究（II）－重要な他者からの評価との関連－名古屋大学教育学部紀要（教育心理学），**40**，99-125.

堀　洋道・松井　豊　1981　学校や交友関係の実態とその影響　学習指導研修，**4**(2)，90-93.

板津裕己　1994　自己受容性と対人態度との関わりについて　教育心理学研究，**42**，86-94.

伊藤美奈子　1989　青年期自我形成における自己受容研究の意義と視点　青年心理学研究，**3**，20-28.

岩永　誠　1991　友人・異性との関係　今泉信人・南博文(編)　人生周期の中の青年心理学　北大路書房　pp.140-152.

梶田叡一　1988　自己意識の心理学（第2版）　東京大学出版会

栗原　彬　1989　やさしさの存在証明－制度と若者とのインターフェイスー　新曜社

Leaper, C. 1994 Exploring the consequences of sex segregation on social relationships. In C. Leaper (Ed.), *Childhood sex segregation: Causes and consequences: New direction for child development.* San Francisco. pp.67-86.

Lieberman, M., Doyle, A. B., & Markiewicz, D. 1999 Developmental patterns in security of attachment to mother and father in late childhood and early adolescence: associations with peer relations. *Child Development*, **70**, 202-213.

前川久男　1989　登校拒否　小林重雄(偏)　子どもの関わり障害　同朋社出版

松井　豊　1990　友人関係の機能　斉藤耕二・菊池章夫(編)　社会化の心理学　ハンドブック　川島書店　pp.283-296.

南　博文　1991　人格の発達　今泉信人・南博文(編)　人生周期の中の青年心理学　北大路書房　pp.90-106.

宮沢秀次　1988　女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究　教育心理学研究，**36**，258-263.

岡田　努　1993a　現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究，**5**，43-55.

岡田　努　1993b　現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係　発達心理学研究，**4**，162-170.

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹波洋子・森　俊夫・矢冨直美　1992　中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係　心理学研究，**63**，310-318.

小此木啓吾　1984　現代青年の知覚－精神分析学的青年論－　青年心理，**43**，156-176.

大出美知子・澤田秀一　1988　自己受容に関する一研究－様相と関連要因をめぐってー　カウンセリング研究，**20**，128-137.

落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，**44**，55-65.

Rogers, C. R. 1944 The development of insight in a counseling relationship. *Journal of Consulting Psychology*, 8, 331-341.（伊東　博(訳)　1966　ロジャーズ全集4　サイコセラピーの過程　岩崎学術出版社）

Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspective on the self.* Vol.3. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.107-135.

Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. 1998 Peer Interactions, Relationships, and Groups. In W. Damon, & N. Eisenberg (Eds.), *The handbook of Child Psychology*, Fifth Edition, Vol.3: Social, emotional, and personality development. John Wiley& Sons, Inc. pp.619-700.

沢崎達夫　1993　自己受容に関する研究(1)－新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討－　カウンセリング研究，**26**，29-37.

Schneider, B. H., Attili, G., Nadel, J. & Weissberg, R. P. 1989 *Social competence in developmental perspective.* Boston: Kluwer Academic.

Shulman, S., Laursen, B., Kalman, Z., & Karpovsky, S. 1997 Adolescent intimacy revisited. *Journal of Youth Adolescent*, **26**, 597-617.

Snyder, M. 1987 *Public appearance, private realities: The psychology of self-monitoring.* New York: Freeman.

高井範子　1999　対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究　教育心理学研究，**47**，317-327.

高井範子　2000　自己受容と生き方態度に関する検討　自己心理学研究，**1**，57-71.

遠矢幸子　1996　友人関係の特性と展開　大坊郁夫・奥田秀宇(編)　親密な対人関係の科学　誠信書房　pp.90-116.

東京都都民生活局（偏）　1979　大都市高校生の心理的特徴と生活環境　同局発行

上野行良・上瀬由美子・松井　豊・福富　護　1994　青年期の交友関係における同調と心理的距離　教育

心理学研究，**42**，21-28.
和田　実　1993　同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異　社会心理学研究，**8**，67-75.
Worell, J., & Danner, F. 1989 *The Adolescent as Decision-maker: Applications to development and education*. Academic Press, Inc.
吉田　昇・門脇厚司・児島和人　1978　現代青年の意識と行動　日本放送出版協会
吉岡和子　2001　友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感　青年心理学研究，**13**，13-30.

（主任指導教官　松田文子）